

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語の書き言葉史をたどる
Author(s)	田中, 草大
Citation	論叢 国語教育学 , 19 : 62 - 71
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/54903">10.15027/54903</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/54903">https://doi.org/10.15027/54903</a>
Right	
Relation	



# 日本語の書き言葉史をたどる

田中 草大

## イントロ 話し言葉と書き言葉

この講演では、次の2つの事柄について概説します。

- ① 日本語の書き言葉史を研究するとは、どのようなことか
- ② 書き言葉史を研究することは、日本語史研究にどう資するか

書き言葉は話し言葉に対立する概念ですので、上の話に先立って、まず話し言葉（音声言語）と書き言葉（文字言語）について簡単に説明します。

まず、両者の違いについて、（ア）聴覚と視覚、（イ）自然習得と学習、という2つの観点からお話しします。

### （ア）聴覚と視覚

話し言葉が聴覚を媒体とするのに対して、書き言葉は視覚を媒体とします。その結果、話し言葉と書き言葉それぞれにおいて、次のような特有の要素が現れます。

話し言葉に特有の要素：声の大きさ・速度・高低・丁寧さ、フィラー、ポーズ、息吸い、身振り  
…… 〈現場性〉

書き言葉に特有の要素：字種・字体・書体、文字の大きさ・丁寧さ、句読点、フィラーの省略  
…… 〈非現場性〉（→記録性）

かたや聴覚、かたや視覚と、基づく媒体が異なることから、原理的に話し言葉と書き言葉とは同一ではありえません。

### （イ）自然習得と学習

例えば、日本語の母語話者（＝音声言語の使用能力を持つ）が、日本語の書き言葉の読み書き能力も持つ、という場合、音声言語は生育の中で自然習得されたのに対して、文字に基づく書き言葉は教育により学習されたものであるという違いがあります。

書き言葉は教育を必要とする、ということは、書き言葉には「教材」があるということになります。かつ、文字言語である以上、その「教材」は目に見える形（文例・辞書・文法書）をとることになります。このことは、ある時期に作られた教材が、時間が経ってからそのままの状態でも参照されうることを意味し、話し言葉に対して書き言葉が保守性を持つことに繋がります。

このように話し言葉と比較して見ると、書き言葉は単に話し言葉を文字に移し替えたものではな

く、独自の特性を有するらしいことが見えてきます。

言語研究においては、一般に書き言葉よりも話し言葉の方が重視されています。これは、書き言葉が話し言葉に基づく二次的な存在であること、文字というものが言語にとって決して必須のものではないこと等に鑑みれば、当然の扱いと言えるかも知れません。状況は歴史研究でもおおよそ同様でして、それは例えば「室町時代の言語資料」といった何気ない表現からもうかがわれます。

「〇〇時代の言語資料」と言う場合、それは「その時代の話し言葉をよく反映している資料」の意味で普通使われるのです。

そのような状況で、書き言葉の歴史を研究することの意義にはどのようなものがあるのでしょうか。それについては次々節で説明することとして、次節では、まず書き言葉史研究の概要について説明していきます。

## 第1節 日本語の書き言葉史を研究するとは、どのようなことか

標記のことについて、「A. 資料」「B. 書き言葉史の概観」「C. 書き言葉史の特徴」「D. 書き言葉史研究の種類と事例」に分けて説明していきます。

### A. 資料

イントロに述べたように、一般的に日本語史資料と言うと、それは話し言葉資料と解されます。しかしながら、同じくイントロで述べたように、書かれたものが音声言語を完璧に反映することはないのですから、つまり録音時代までは純粋な話し言葉資料は存在しない（言語資料＝書き言葉資料）ということになります。

ただし、その書き言葉資料の中に、話し言葉を比較的色濃く反映するもの（いわば話し言葉的書き言葉資料）と、話し言葉を比較的反映しないもの（いわば書き言葉的書き言葉資料）とがあつて、前者が（話し言葉資料という意味での）日本語史資料として評価されているわけです。

しかし、書き言葉全体の中で、このような話し言葉的書き言葉資料は圧倒的少数派と言えます。書き言葉にわざわざ話し言葉を色濃く反映させるというのは、特別な動機・目的があつてのことでした（現代でも、例えば関西弁話者が話し言葉（＝関西弁）で文章を綴るのは、特別な動機・目的がある場合に限られるでしょう）。

この「話し言葉を色濃く反映させる特別な動機・目的」には、例えば「a. 語学教育のため」「b. 講義資料（講師の口吻を伝える）」「c. 演劇台本や文芸資料（キャラクターの口吻を伝える）」などが考えられます。日本語史における有名資料に則して言うと、キリシタン資料や朝鮮資料が a. に、抄物や心学道話が b. に、狂言台本や近世の文芸資料が c. に当てはまります。

逆に言えば、こうした特別な条件に当てはまるもの以外の文章は、書き言葉的書き言葉によって書かれました。例えば近世を例に取ってみると、書き言葉的書き言葉資料は、実務的文章のほぼ全般（文書（私文書・公文書）、記録（日記）、学術書、史書など）と、文芸的文章の大方（随想、紀行文、物語（例：読本）、韻文（漢詩文を含む）など）を占めます。

### B. 書き言葉史の概観

【上代：～奈良時代】 …… 詳細不明の時代

この時代は、書き言葉資料自体は残っていますが（主に漢文）、そのヨミを示す資料が不足しており（漢文のヨミを示す訓点資料が残るのは平安時代初期から）、話し言葉と書き言葉の関係は詳

細不明です。

例えば次の文章は「作奏也」のような日本語的要素<sup>1</sup>を含む漢文であり、現存最古の日本語文と解釈しうるものですが、具体的にどのような日本語を記したものであるかの特定は困難です。

歳次丙寅年 正月生十八日記、高屋大夫 為<sub>二</sub>分韓婦夫人 名阿麻古<sub>一</sub>、願南无頂礼 作奏也、  
(菩薩半跏像銘・606 or 666年。法隆寺宝物、東京国立博物館蔵)

おそらくは次代(中古)と同様に、話し言葉と書き言葉はおおよそ共通する文法に拠っていただろうと推測はされますが、それを資料的に裏付けることは難しいと考えられます。

#### 【中古：平安初期～後期】 …… 言文一致の時代

訓点資料の登場によって書き言葉(漢文)の様相がうかがえるようになります。追って、仮名書き散文の登場により、話し言葉の様相もかなりの程度明らかになります。

両者を比較してみると、話し言葉と書き言葉には明確な文体差がある一方で、文法的には共通点が大きいのであり、広い意味での「言文一致」状態であったと見なせます。次に、話し言葉の例として『紫式部日記』(の、特に会話部分)を、書き言葉の例として藤原実資の日記『小右記』の一節をそれぞれ挙げます。

殿(=道長)、例の酔はせたまへり。わづらはしと思ひて、かくろへ<sup>て</sup>あたるに、「など、御父の、御前の御遊びにめしつるに、さぶらはでいそぎまか<sup>で</sup>にける。ひがみたり」など、むつからせたまふ。「ゆるさるばかり歌ひとつ仕うまつれ。親のかはりに。初子の日なり、詠め詠め」とせめさせたまふ。  
(紫式部日記・新編日本古典文学全集 217頁)

太閤(=道長)招<sub>二</sub>呼下官<sub>一</sub>云、「欲<sub>レ</sub>読<sub>二</sub>和歌<sub>一</sub>、必<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>和」者、答云「何不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>和乎」、又云「誇たる歌になむ有る、但非<sub>二</sub>宿構<sub>一</sub>」者、「此世乎は我世とぞ思 望月乃虧たる事も無と思へば」、余申云、「御歌優美也、無<sub>レ</sub>方<sub>二</sub>酬答<sub>一</sub>、満座只可<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>此御歌<sub>一</sub>、……」

[訓読案]太閤 下官を招き呼びて云く、「和歌を讀まむと欲ふ。必ず和す可<sup>て</sup>し」者れば、答へて云く「何ぞ和し奉ららん乎」。又云く「誇りたる歌になむ有る。但し宿構に非ず」者り。「此の世をば我世とぞ思ふ望月の虧けたる事も無しと思へば」。余申して云く、「御歌優美也。酬答せむ方無し。満座只此の御歌を誦す可し。……」

(小右記・1018(寛仁2)年10月16日条・大日本古記録⑤ 53-55頁)

『小右記』に漢語の使用が目立つなど、文体上の相違は見られるものの、両者ともいわゆる古典文法の範疇で話されて／書かれていることが分かります。なお、下線部はどちらも藤原道長が(かたや紫式部に、かたや藤原実資に)歌を詠むよう求めているところですが、「詠め詠め」という命令形の繰り返すと、「和すべし」というベシの使用とに相違が表れています。

#### 【中世前期：院政鎌倉時代】 …… 言文二途の分岐点

1 「奏」が「作」に付加する謙讓語の表記として使われている点が日本語的要素と見なされます。

話し言葉では、中古の文法（いわゆる古典文法）からの変化が徐々に起こっていたと見られます。例えば次の例は 12 世紀前半に作られた説経の聞き書きである『法華百座聞書抄』の一節ですが、係り結びでもないのに文末に「～ケル」という連体形が用いられている（下線部）など、文法の変化を示す部分があります。

ヨロコビヲガミテサリタマヒヌ。供養シタテマツリタマヒタリケルヨノユメニ、又「コノ経クヤウ(中)（供養）シタマフニヨリ、兜卒天ニナムムマレヌル」トテ、ヨロコビタマヒケル。（表 452）

その一方で、旧来の文法通りに記されている部分も多くあります。古典文法との差がまだ小さかったので、普段は古典文法から変化した文法で喋っていても、文字化する際には修正を利かせやすかったものと考えられます（つまり、文法変化を含む文章が、全体として話し言葉そのままを示しているとは考えにくい）。

話し言葉が常に変わっていくのに対して、書き言葉は保守性を持つ、よって両者が徐々に離れていく——その様子が窺われ出すのがこの時代です。

#### 【中世後期～近世：室町時代～江戸時代】 …… 言文二途の時代

この時代には、話し言葉の文法とは大きく異なる文法によって書くということが明確化します。まず当時の話し言葉の方を見ておきます。次の例は、キリシタン資料の一書、通称『天草版平家物語』（1592 年刊）の一節です。この時代、話し言葉はすでに古典文法の範疇を明らかに脱していることが分かります。

右馬允：なう喜一 ついでにその清盛の事をも聞きたいよ。

喜 一：こなたさえ くたびれさしえられずわ、わたくしわ何ぼ一なりとも語りまらしょー。

右馬允：いいや、このやうな事をば身共らわ七日七夜聞いても飽かぬぞよ。

喜 一：それならば語りまらしょー。（10 頁。原文ローマ字）

他方、次に掲げるのは書き言葉の例で、上の『天草版平家物語』とほぼ同時期の 16 世紀末に作られた中なかのいん院通勝みんごうにつそ『岷江入楚』（『源氏物語』の注釈書）の一節です。

いづれの御時にか 此発端の詞、甚深にして、あまたの理をふくめり。<sup>まづ</sup>先作意をあらはさずして、聞伝へたる事を書おきたるやうにみせたり。其始末なほ末々の巻に見えたり。（略）

いとやむごとなききはにはあらぬが 無止事也。位高くすぐれたる人の事はさしおかれぬ物なれば、やんごとなしと云ほめたる詞也。「やん」と読べし。（第 1）

『天草版平家物語』と『岷江入楚』を比べ見ると、話し言葉の文法と書き言葉の文法とが明瞭に分かれる「言文二途」の段階に入っていることが分かります。話し言葉と異なる文法で書かれた文章のことを「文語文」と呼びますが、その意味での文語文が確立した時代であると言えます。

この状況は、次代の江戸時代になっても同様です。ただ、一口に文語文と言っても通俗・平易なもの（書簡や触書などの候文や、黄表紙など通俗書に用いられた文語文）から高尚・複雑なもの

(白話語彙などを採り入れた読本の文章や、国学者等による擬古文など)まで、非常に幅広いバリエーションが存したことがこの時代の特徴として指摘できます。

### 【近代：明治時代～20世紀半ば】 …… 言文(再)一致の時代

周知の通り、明治時代には言文一致運動——すなわち、書き言葉を当時の話し言葉に基づいたものに改新する動き——が起こり、これが現代書き言葉の直接の祖となっています。ここで注意しておきたいのは書き言葉には色々なバリエーションがあって、言文一致(口語化)はそれらに対して均一に起こったのではないということです。

比較的早く言文一致の定着を見たのは小説の分野で明治30～40年代、新聞はそれよりもしばらく遅れて大正10年前後であることが知られています。逆に言文一致が遅れたのは法律で、口語化が行われだしたのは昭和20年代、基本六法でさえ完全に口語化したのはなんと2018年のことです(商法の口語体統一化による)。

### C. 書き言葉史の特徴

話し言葉史と対比して、書き言葉史に特徴的な要素があります。筆頭として挙げられるのは文体でしょう。もちろん話し言葉にも文体に相当するようなバリエーションは存しますが、口語体と文語体のように文法自体ががらりと違うような幅広さは書き言葉ならではのと言えます。

表記との関係も、書き言葉ならではの特徴と言えます。分かりやすい例として、文語文において用いられた「花を見るの記」「児童を就学せしむるの義務」のような、用言と体言に介在する「の」があります。このような語法は、「為仁之本」のような漢文における「之」字の訓読に由来するものとされており(小林芳規「花を見るの記」の言い方の成立追考(『文学論藻』14、1959年))、表記が書き言葉に影響した例と言えます。

また、「手本」の存在も書き言葉史に特徴的なものと言えます。和歌史において、『万葉集』に立ち返る作風が幾度も現れることが知られていますが、このようなことは話し言葉史においてはまず考えにくいものです。「手本」が目に見える形で存在しているからこそ起こる事象と言えます。このことは、書き言葉が教育制度に直接的な影響を受けることも示唆しています。

これらに加えて、日本語学史も書き言葉史においては話し言葉史と異なる働きを持ちます。日本語学すなわち日本語研究——より広く言うと、日本語についての言説——は、話し言葉にも影響を及ぼすことがあります(例えば「目上の人に『承知しました』と言うのは失礼だ」という言説の流布が、この語の使用を抑制する等)、母語ではない文語文の使用においてはこれが遥かに強い影響力を持ちます。このことを示す例として、安田純生『現代短歌のことば』(邑書林、1993年)の説明を次に引きます。

伝聞・推定の「なり」は、かつては、詠嘆・感動を示していると考えられていた。(略)『言海』でこの「なり」を引くと、「なトイフ感動詞ニ、語尾変化アルモノニテ、動作ヲ言ヒ終ヘタル餘意ニ発スル助動詞」と出ており、巻頭の「語法指南」には「詠歎ノ助動詞」として掲げられている。(略)昭和四年に立命館出版部から刊行された生田蝶介・松本仁共著『短歌文法七十講』をひもといても、なお、詠嘆の助動詞としてのみ解説されているし、同十年刊の『辞苑』や同十四年刊の『修訂大日本国語辞典』の「なり」の項にも、それぞれ「動作をいひをへて詠歎の意を示す語」「動作をいひ終はり、餘情を含ましむる詠歎の語」とある。高校生のと

きに伝聞・推定と教えられた私などから見れば、これは誤解としか思えないが、近世から近代にかけての短歌には、そういう誤解にもとづいて詠まれている作品がほとんどのはずである。

(略) 若山牧水の作、

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花 (『山桜の歌』)

の場合、大正期に詠まれた歌だから、作者が詠嘆のつもりで「すなり」といったのは、はっきりしている。 (92-95 頁。下線引用者)

詠嘆・感動説も伝聞・推定説も、どちらも日本語史研究の成果であり、それらが実際の言語使用に直接影響しているのです。上の記述は、「過去の文語文を適切に理解するためには、『古典文法として』正しくはどういう意味であるか』ではなく、『その時代にどういう意味であると考えられていたか』を把握する必要がある」ということを鋭く示唆しています。

#### D. 書き言葉史研究の種類と事例

書き言葉史の研究は、話し言葉史と同様に、共時的研究と通時的研究という 2 つの観点から行われます。ここでは、共時的研究の先駆的な例として、本居宣長『玉あられ』(1792(寛政 4)年刊)を紹介します。

『玉あられ』は当時行われていた文章に見られる、伝統的用法を逸脱した語法や語彙を指摘して適切な使い方を説いたものです。次に 2 つの事例を挙げます。

「と」と受る上の格

すべてと「と」いふ詞の上の受<sup>ウケ</sup>、定まれる格あることなるを、今の人のつゞげざまはいとみだり也、定まれる格とはたとへば、「花さきぬと」といひて、「咲ぬると」とはいはず、「郭公聞つと」といひて、「聞つると」とはいはず、(略) これらも古人はおのづからよくわきまへて、をさをさ誤ることはなかりしを、ちかき世の人は、此けぢめをしらず、みだりにつゞくる也、歌のみにもあらず、文にも道の記などに、「某山をこゆるとて」など、誰もかく、これも「こゆとて」といふ格にこそあれ、……。 (筑摩書房版全集⑤ 475 頁)

「何」の類の下に「や」もじをおく事

……たとへば「いかなることにかあらん」「たれにかあらん」などいふべきを、「いかなることにやあらん」「たれにやあらん」などいひ、又「いく年月をかへぬる」「たが里よりかきぬらん」などいふべきを、「いく年月をやへぬる」「たが里よりやきぬらん」などいふ、かやうの類の「や」は皆ひがこと也、古の歌文を見てわきまふべし、……。 (同⑤ 474 頁)

1 例目では、引用の「と」が終止形でなく連体形に接続している事象を、2 例目では、「いかなる」「たれ」といった疑問詞が「か」でなく「や」と結びつけられている事象を指摘・批判しています。

本書は、宣長の「よからぬ詞、えもいはぬひがことどもの、世にあまねくひろごりて、さだまれることことの如なるは、いとかたはらいたきわざになむ有ける」(序)という問題意識により、つまり誤った語法を戒めるために書かれたのですが、結果的にそれは当時の書き言葉にどのような語法が行われていたかという、共時的な状況を示すものにもなっているわけです。なお、そうした語法

がどのように使われ定着したかという観点から論ずれば、それは通時の研究となります。

## 第2節 書き言葉の歴史を研究することは、日本語史研究にどう資するか

イントロで述べたように、言語史は一般的に話し言葉の歴史を対象としています。そのような状況にあつて書き言葉の歴史を究明することの意義や効能は、どのようなところに認められるのでしょうか。

このことについて、「A. 文体のモザイクへの《解像度》が上がる」「B. 現代書き言葉の淵源をたどることになる」の2点から説明していきます。

### A. 文体のモザイクへの《解像度》が上がる

第1節 A.で述べたように、録音時代以前の話し言葉の研究においては、話し言葉そのものを対象とすることはできず、話し言葉の書き言葉資料によって当時の話し言葉をうかがうことになります。しかし、話し言葉の書き言葉資料は直接的にはあくまで書き言葉資料なので、その中に話し言葉的要素と書き言葉的要素とが混在しています。話し言葉の書き言葉資料だけを見ていると、その中のどこが話し言葉的要素で、どこが書き言葉的要素なのか、識別することはできません。

ここに、書き言葉史研究の一つの効能があります。すなわち同じ時代の書き言葉的書き言葉の実態を知ることで、話し言葉の書き言葉資料における書き言葉的要素を識別することができるのです。

一例として、話し言葉的書き言葉資料である夏目漱石『吾輩は猫である』と『三四郎』の一節を次に挙げます。

元来我々同族間では目刺の頭でも<sup>ほら</sup>鯨の臍でも一番先に見つけたものが之を食ふ権利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へてよい位のものだ。然るに彼等人間は毫もこの観念がないと見えて、我等が見つけた御馳走は必ず彼等の為に掠奪せらるゝのである。  
(吾輩は猫である・第1章)

考へると、上京以来自分の運命は大概与次郎の為に製へられてゐる。(略) 向後も此愛すべき悪戯ものの為に、自分の運命を握られてゐさうに思ふ。  
(三四郎・第9章)

下線で示したように、上の例では受身文の旧主語（動作主）が「に」ではなく「のために」によって標示されています。実はこの構文は次のように漢文（漢文訓読文）に古くから例のあるものであり、漱石の例もこうした書き言葉的語法を承けたものと捉えられます<sup>2</sup>。

生死の之為に纏<sup>(ら)</sup>縛<sup>じ</sup>せ所<sup>レ</sup>不、〈原文：不為生死之所纏縛〉 ※[ ]は不読字。

(西大寺本金光明最勝王経平安初期点・巻1-370行)

2 「～のために」受身文について、以下の論考を参照のこと。

田中草大「～のために（～によって）…られる [特集：コーパスによる語史と現代語誌]」（『日本語学』39(2)、2020年）

田中草大「変体漢文の構文論的研究：受身文の旧主語表示を例に」（『国語国文』89(11)、2020年）

永澤清「「Xノタメニ」受身文の残存と衰退：近現代コーパスからみる」（『日本語文法』21(1)、2021年）



然間以去年七月十五日、根本薬師堂為大風被吹倒、

[訓読案]然の間去年七月十五日を以て、根本薬師堂 大風の為に吹き倒さ<sup>る</sup>被、

(土佐国金剛頂寺解案・1070(延久2)年7月8日・平安遺文1047号)

このように、書き言葉史を知ることによって、話し言葉の書き言葉の中の複層性、すなわち「文体のモザイク」をより細かに把握することができるのです。

## B. 現代書き言葉の淵源をたどることになる

第1節Bでも確認したように、明治時代になって書き言葉の文法が文語文法から口語文法へと大転換しました。これを素直に捉えると、言文一致の前と後とで日本語書き言葉は非連続的である——私たちの用いる書き言葉は旧時の文語文とは繋がっていない——ということになりそうです。

ところが、実際の口語文を見ていると、その「非連続的」ということが疑われてくるようなものがあることに気付かされます。例えば次の文をご覧ください。

初めて哲学研究に入らんとする者を、真の意味に於ける哲学的思索、殊にカントの批判的見地に立てる精緻にして厳密なる思索を本質とする理想主義哲学と此哲学の必然的手段たる批判的方法とに導く為めに、現代哲学中最も深遠なる一学派、所謂西南独逸派の代表者たる故ウィンドルバントの最後の著述『哲学概論』(一九一四年出版)を出来る丈け自分のものとし之れに取捨選択を加へて解説的叙述を試みたのが此の哲学概論である。

(宮本和吉『哲学概論』(岩波書店、1916年)序<sup>3)</sup>)

この長い1文は、「である」で終わっていますので口語文と見なされます。またその少し前の「試みたのが」も口語文法による表現です。しかしながら、文全体を見ると、「入らんとする」「見地に立てる」「精緻にして厳密なる」「手段たる」というように、文語の語法がふんだんに盛り込まれていることも分かります。こちらを主体にして見ると、むしろこの文は大筋としては文語文として書かれているものを、文末部分をチョイチョイと口語要素に置き換えたもの、というふうになさえ捉えられます。

続いて、次の文章を読んでみて下さい。

我が国に於ける音韻の研究には漢字の音の研究と悉曇の研究との二の源がある。悉曇の研究は梵字と梵語との研究を含むものであるが、それが本邦に入り来つたはじめは明かでない。弘法大師が大悉曇章を唐から将来して、それを嵯峨天皇に奉つたことは著しいが、その研究は未だ世に弘まらなかつたやうに思ふ。仁明天皇の御世に智証大師が唐に行き、之を学んでかへつてから本邦に弘まつたものやうである。

(山田孝雄『国語学史要』(岩波書店、1935年)210頁)

こちらは、先ほど掲げた『哲学概論』に比べると、特段文語文らしい要素を含んでいるようには

---

3 林四郎「現代の文体」(『岩波講座日本語10 文体』(岩波書店、1977年))364頁より引用。

見えません。いわゆる歴史的仮名遣いで書かれていることを除けば、現代の書き言葉として違和感なく読めると思います。

さて、上の文章と対照しながら次の文章も読んでみて下さい。

我が国に於ける音韻の研究には漢字の音の研究と悉曇の研究との二の源あり。悉曇の研究は梵字と梵語との研究を含むものなるが、その本邦に入り来りしはじめは明かならず。弘法大師が大悉曇章を唐より将来してこれを嵯峨天皇に奉りたることは著しき事なれど、その研究は未だ世に弘まらざりしものと思はる。仁明天皇の御世に智証大師唐に行き悉曇を学んで帰朝してより後本邦に弘まりたるものの如し。

(山田孝雄『国語学史』(宝文館、1943年) 604頁)

比べてみると明らかなように、先の『国語学史要』の文章は、実はこの『国語学史』の文語文を口語体に書き改めたものだったのです<sup>4</sup>。両者を比べると、文語文から口語文への書き換えというのは思ったほど大がかりなものではなく、むしろ個々の要素の半ば機械的な置き換えによって実現可能であるらしいこと、別の言い方をすれば、新造の口語文の骨格は実は旧来の文語文に拠っている<sup>5</sup>らしいことが、察せられます。

以上の『哲学概論』や『国語学史要』『国語学史』のような例を見てみると、文語文と口語文とはむしろ連続的である——より慎重な言い方をすれば、口語文の出自には話し言葉を文字化したものだけでなく従来の文語文を基にしたものもあるのでは、というふうに思われてくるのです。

つまり、書き言葉史の実態を知ることによって、現代の書き言葉がどのようにできているかを、より精密に把握できるようになることが期待されるのです。

## まとめ

以上、この講演では次の流れに沿って、日本語の書き言葉史研究について概説しました。

イントロ：話し言葉と書き言葉

- ① 書き言葉史を研究するとは、どのようなことか
  - A. 資料
  - B. 書き言葉史の概観
  - C. 書き言葉史の特徴
  - D. 書き言葉史研究の種類と事例

---

4 文語体の『国語学史』の方が刊行年は後なのですが、元の内容の執筆は1921(大正10)年まで遡ることが記されており、文語体が元の形であってそこから書き改められた口語体の『国語学史要』の方が先に出版された、と捉えられます。

5 森岡健二編著『近代語の成立：文体編』(明治書院、1991年)では、森林太郎(鴎外)・高山樗牛・北村透谷の文語文を挙げた上で、「いずれも文語で書かれた普通文つまり実用文であるが、その発想は現代の口語体と同じで、活用と助動詞を改めれば、そのまま口語体の文章になる」と指摘されています(122頁。下線引用者)。ただし下線部のように、その理由を(口語文が文語文に基づいているためではなく)近代文語文が話し言葉の発想で書かれているためとしています。

② 書き言葉史を研究することは、日本語史研究にどう資するか

A. 文体のモザイクへの《解像度》が上がる

B. 現代書き言葉の淵源をたどることになる

[付記]

本稿は広島大学教育学部・国語文化教育学講座「国語教育カフェ冬：2022 後期学内研究発表会」（2022年11月12日）での講演をもとに文章化したものです。お招きくださった佐々木勇先生はじめ国語文化教育学講座の皆様、当日ご参加くださった皆様に心より感謝申し上げます。

（京都大学）